

第59回日本小児保健協会学術集会学会報告

The 59th Annual Meeting of the Japanese Society of Child Health

会頭 小田 慈 (岡山大学病院 小児血液腫瘍科, 岡山大学大学院保健学研究科)

Megumi Oda (Department of Pediatric Hematology and Oncology, Okayama University Hospital, Graduate School of Health Sciences, Okayama University)

第59回日本小児保健協会学術集会：メインテーマ「愛しい子どもたちに～今、私たちにできること」が、平成24年9月27日(木)～29日(土)の3日間、岡山コンベンションセンターにおいて開催され、学術集会同会頭を務めましたので、報告させていただきます。

本学術集会は会員数4,700名を擁する公益社団法人日本小児保健協会が開催する年次学術集会で、毎年春に開催される日本小児科学会学術集会と並び、我が国の小児医療・保健・福祉に関する総合的かつ学術的な大きな2つのイベントの1つです。岡山で開催されますのは、昭和42年、故浜本英次岡山大学名誉教授が第14回学術集会同会頭を務められて以来、45年ぶりのことでした。

我が国は近年、少子高齢化が進み、社会情勢や人々の生活様式も大きく変わり、小児の医療、保健、福祉そして教育のあり方にも大きな変革が望まれています。

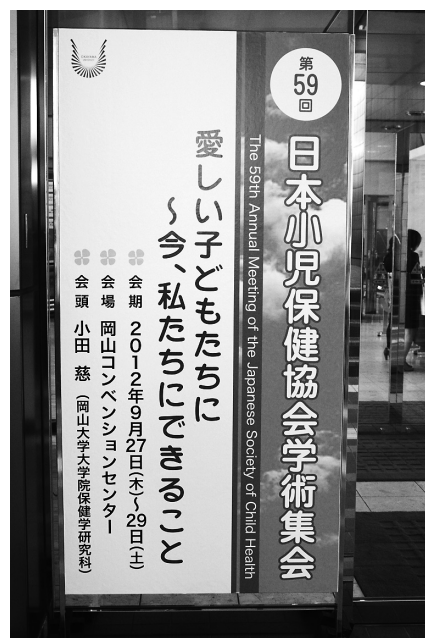
移植医療、再生医療などの先進医療の進歩などに伴うチーム医療の重要性の認識とコンセンサスの形成、卒後臨床研修制度の導入などに伴う地域における小児科医の不足や偏在、そして小児医療施設の集約化と均てん化、時間外診療を含む小児救急の問題、慢性疾患や成長・発達障がいをかかえた子どもたちや、ご家族の支援等々、様々な問題が小児医療の現場に突きつけられています。さらに育児・養育過誤や児童虐待、非行の若年化、引きこもりや通学困難、地域・家庭における子育てのあり方、子どもにやさしい環境整備、感染症対策・ワクチン等による疾病予防など、子どもたちの、より良い成育環境作りの為の医療、保健、福祉や教育の連携の必要性と重要性はかつてないほど強く認識されています。従って、小児を取り巻く生活環境に係わるすべての職種の方々が職種の枠を超えて協力

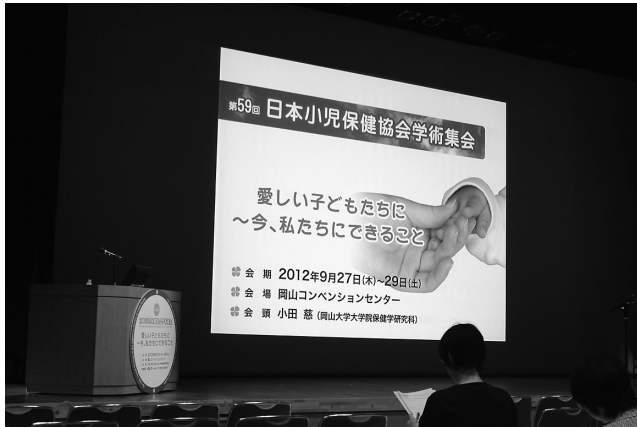
して新しい知識の習得、そして技術の研鑽を怠ることは許されません。

このような社会的状況・要請を背景に、本学術集会におきましては様々な方面からの招聘講演、基調講演、特別講演、教育講演や一般講演、シンポジウム、各種セミナーなどを企画しました。

学術集会初日には、小児救急電話相談スキルアップ研修会、DENVERⅡ講習会に加え岡山県、岡山県小児保健協会との共催で、市民公開講座「虐待の連鎖を断ち切る支援とは一親子と向き合う我々に、求められていること、できること一」を開催しました。300名余の参加者があり、4名のパネリストによる講演のあと熱心な質疑応答が続きました。

学術集会2～3日目には各講演、シンポジウム、一般演題発表が行われました。30年以上にわたりユニセフなどで国際公務員として活躍中の浦元義照氏による招請講演「開発・紛争と平和構築～国際公務員として34年間の経験から伝えたいこと」では、American Field





Service 交換留学生としての米国での高校生活体験から得た人生観から芽生えた国際貢献への気持ち、そして、その後の世界各地での紛争の実態、そして平和の大切さが、自らの経験の中から伝えられ、参加者の心に深い感銘を与える講演となりました。

永く我が国における、小児保健の実践と学術的リーダーであった、平山宗宏東京大学名誉教授による基調講演「わが国の小児保健 百年の歩み — 戦後50年で乳児死亡率を世界最低にできた背景を考える —」では、第2次世界大戦後、20世紀後半の我が国における小児保健のレベルの目覚ましい向上とその背景が述べられました。平山先生をはじめとする先駆者の方々の想いやご努力を、子どもたちの幸福のために、今後、現場で小児保健に携わる人々は継続し、引き継いでほしいというメッセージが込められていました。特別講演は、小谷信行先生（松山赤十字病院副院長）による「地方都市における成育医療の試み～多職種のメンバーの協働の大切さ」、谷池雅子先生（大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科教授）による「科学的視点をもって発達障害児を支援する」、清野佳紀先生（大阪厚生年金病院名誉院長／岡山大学名誉教授）による「医療現場におけるワークライフバランスの重要性」、森島恒雄先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児医科学教授）による「院内感染で重要な小児感染症」の何れも、現在の小児医療・保健・福祉において重要なテーマを取り上げた4講演が行われました。更に教育講演として「子どもと家族を支える小児保健サービス」、「こどもが突然倒れた！救急車が到着する前に何ができるか？」「背の低いこどもの見方」「エビデンスのための統計学の基礎」、「グラウンデッ

ド・セオリー・アプローチ入門」の5講演、指定講演として「山梨県における小児救急体制『山梨システム』の構築」が行われました。

シンポジウムでは、「ふだんのかかわりから始める発達支援～多職種が連携した子育て支援の輪の中で～」、「小児がん患者と家族および、子育て世代のがん患者とその家族の支援」、「性同一障害診療の実際と子どもに関する課題」、「こどものころから大切にしたい、歯、目、耳～豊かな老後のために」、「ワクチンで防ぐこどもの病気」の5つのテーマが取り上げられ、いずれの会場においても、シンポジストの方々の心のこもった講演、それに引き続く熱心なディスカッションが続きました。

一般演題は236題の応募があり、全演題の発表が口演で行われました。日頃の小児保健活動の実践、あるいは研究成果の発表が続き、各会場で、明日に続く質疑応答が行われました。

今回の学術集会には、全国から、1,000人を超える、医師、歯科医師、看護師、保健師、養護教諭など教育関係者、保育園・幼稚園関係者、行政関係者など多くの職種の方々のご参加がありました。心から御礼を申し上げます。

また、開催にあたり、学術ランチ企画をはじめ、多くの企業のご支援を受けました。最後になりましたが、プログラム選定委員を務めていただいた諸先生、学会運営に携わっていただいた、岡山大学医学部保健学科学生、大学院保健学研究科教員、岡山大学小児科スタッフの皆様、特に学術集会事務局長を務めていただいた、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児医科学塚原宏一准教授に、厚く御礼申し上げます。

